

奈良市まちづくり市民会議
提案書

平成22年3月

奈良市まちづくり市民会議

奈良市まちづくり市民会議 提案書

目 次

1 奈良市まちづくり市民会議の概要	1
(1) 奈良市まちづくり市民会議とは	1
(2) 奈良市まちづくり市民会議の流れ	2
(3) 各分科会のテーマについて	3
2 各分科会が考えた「テーマ別将来像」	6
(1) 第1分科会(テーマ:生きやすいまちづくり)	6
(2) 第2分科会(テーマ:魅力を生かすまちづくり)	8
(3) 第3分科会(テーマ:活気あるまちづくり)	10
(4) 第4分科会(テーマ:人をつくるまちづくり)	12
(5) 第5分科会(テーマ:住みやすいまちづくり)	14
(6) 第6分科会(テーマ:市民と行政とのまちづくり)	16
3 奈良市全体の将来像	18
(1) 「奈良市全体の将来像」を考えるための様々なキーワード	18
(2) 各分科会の考える「奈良市全体の将来像」	19
4 将来像の実現に向けて(参考意見)	26
参考資料	27
(1) 奈良市まちづくり市民会議委員名簿	27
(2) 奈良市まちづくり市民会議検討経過	28
(3) テーマ別将来像付属資料	29

1 奈良市まちづくり市民会議の概要

(1) 奈良市まちづくり市民会議とは

奈良市まちづくり市民会議は、奈良市第4次総合計画の策定にあたって、市民との協働による計画策定を推進するため設置された会議である。

これまでの奈良市の総合計画は行政の計画であり、総合計画に市民の意見を反映させる手法は、次の2つに限られていた。

《総合計画に市民の意見を反映させるための、従来手法》

- ①策定初期に行う基礎調査の段階での市民意識調査
- ②基本構想の案や基本計画の案がある程度完成した段階で実施されるパブリックコメント(意見募集)

これに対して、今回策定される奈良市第4次総合計画は、行政だけの計画ではなく、市民とともにまちづくりを進めるための計画として策定が進められている。そのため、これまでに行われていた手法だけでなく、計画策定のあらゆる段階で市民の意見を取り入れる必要が生じた。

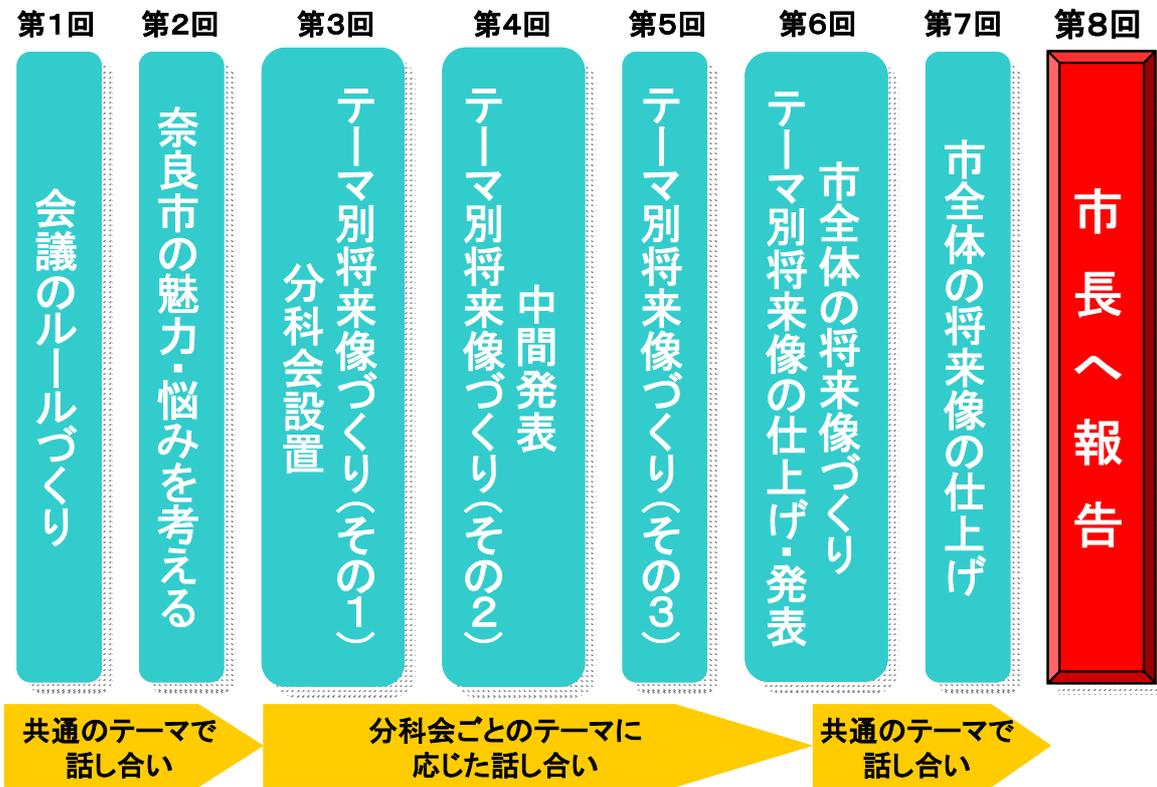
このため、市民の意見を取り入れる新たな手法の一つとして、市民の視点から「総合計画の基本構想策定に係る奈良市の将来都市像、今後のまちづくりの基本的方向等について議論し、市長に報告する」組織である「奈良市まちづくり市民会議」が設置された。部分的ではあるものの、総合計画の原案作成の過程に市民が参加するのは今回が初めての試みである。

なお、奈良市まちづくり市民会議では、基本構想における「奈良市の将来都市像」及び「今後のまちづくりの基本的方向」に対応するものとして、「奈良市全体の将来像」及び「テーマ別将来像」を検討した。

(2) 奈良市まちづくり市民会議の流れ

奈良市まちづくり市民会議では、平成21年10月から平成22年3月までの間に、全8回の会議を行った。その概略は次の図のとおりである(図1)。

【図1】奈良市まちづくり市民会議の流れ



(3) 各分科会のテーマについて

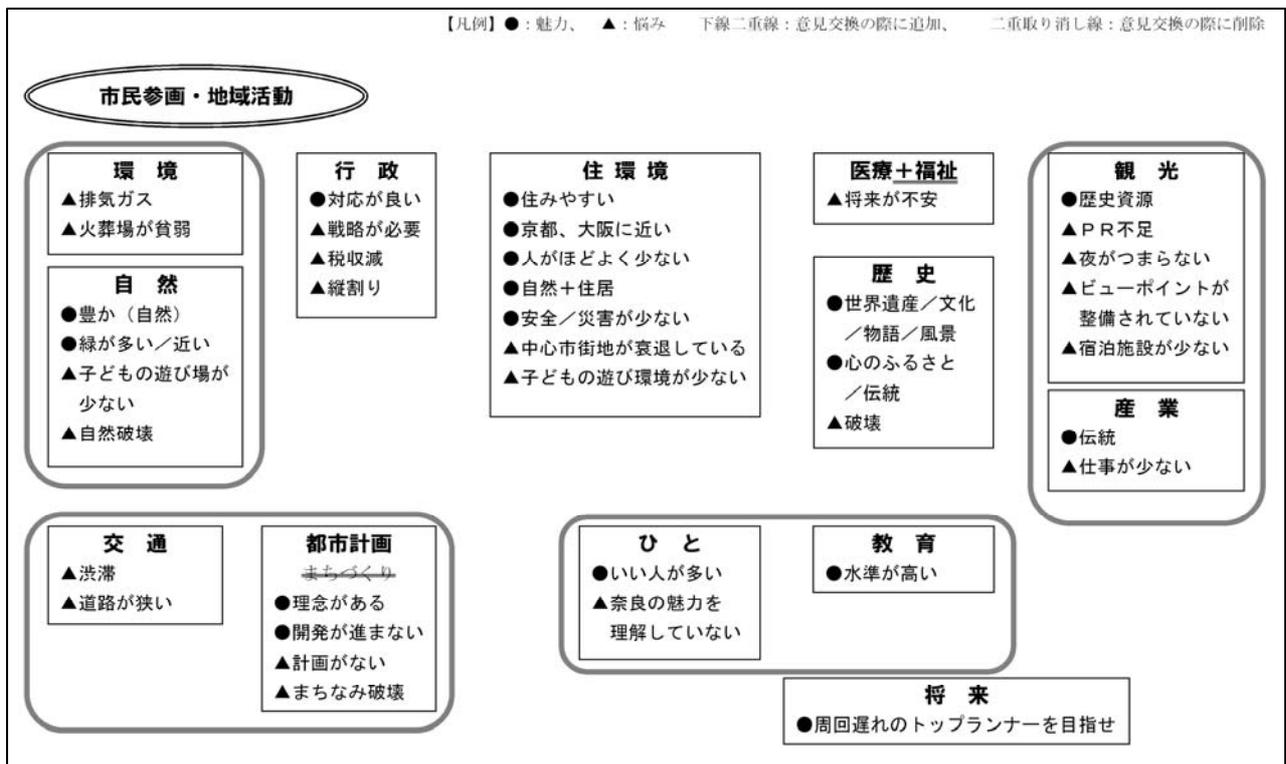
各分科会のテーマの決定については、単一の分野だけでは対応しきれない課題や複数の分野が連携する必要のある課題が近年生じていることから、委員の考える奈良市の魅力(長所・のぼすべきところ)・悩み(短所・課題・改善すべきところ)をグループ化することによってテーマを抽出する手法をとった。

まず、第2回会議において、グループ発表をもとに、奈良市の魅力・悩みを検討し、関連するものをキーワード群としてまとめた(図2)。また、各グループ内でまとめられた魅力・悩みのキーワードは、事務局が分類・整理した(表1)。

最終的に、事務局がこれらのキーワード群を6つにまとめ、それぞれのイメージを表現する言葉を考えて各分科会のテーマとした(表2)。

なお、分科会のテーマは、委員が議論を始めるための糸口として事務局が用意した仮のテーマであり、将来像そのものではない。

【図2】第2回会議時にまとめた奈良市の魅力・悩みのキーワード群



【表1】第2回会議後、事務局が整理した奈良市の魅力・悩みのキーワードと意見分類

分科会テーマ 関連キーワード	意見分類※
ひと・人口・ 少子高齢化	人口減少／小さなまち／少子化／子育て／大学生・若者が流出／高齢化／医療
医療・福祉	医療
歴史	歴史／奈良のルーツ／歴史・物語
文化・伝統	文化／文化力／文化財／歴史と文化財／文化遺産／伝統文化・伝統行事／文化的イベント／文化活動／伝統技術
自然	自然／(自然・森林・緑)／自然破壊／自然風景・眺望／鹿／のどか／暮らしやすい／静か ／空気良い／農業
景観	まちなみ／まちの風景／まちなみ景観破壊／シャッターポイント／街路樹
心のふるさと ・誇り	心のふるさと・誇り／市民自身が魅力を知らない
観光	観光／宿泊／土産・郷土料理／まちがコンパクト
情報発信	情報発信／情報発信の工夫
都市計画	都市計画／開発／市街地整備の遅れ／インフラ施設／街路樹の管理
産業	産業／製造業弱体／働く場がない／地元活力／若者が楽しむ場所がない
観光	観光／宿泊／土産・郷土料理／まちがコンパクト
教育	教育水準／子育て／奈良の歴史・研究／その他施設／平和の伝え方
地域づくり ・コミュニティ	コミュニティ／人間関係／地域活動／自治意識の低下／地域間交流
市民意識	人の気質／保守的／のんびり／市民自身が魅力を知らない／関心低い(市政・環境問題 等)
人材を生かす	人生かききれていない／協働
安全・安心 (安全・防災)	自然災害／防災／治安／安心(高齢者対策・人柄等)
住環境	住みやすさ／ベッドタウン
交通	交通利便性／人・自転車にやさしくない／公共交通／渋滞／道路標識 /観光ルート／道 路建設
生活環境	意外と便利／表示・町名／下水処理・廃棄物処理・斎場等／楽しむところ・広場・遊び場
地球環境	自然保全・自然破壊／交通渋滞
行政運営	財政／その他行政運営／市議会・審議会

※意見分類は、各グループワークで作成された模造紙に記載されている意見の分類である。

【表2】事務局が設定した分科会の分類と(仮)テーマ

分科会名	(仮)テーマ	関連するキーワード
第1分科会	生きやすい まちづくり	人口・少子高齢化／医療、福祉
第2分科会	魅力を生かす まちづくり	歴史／文化・伝統／自然／景観／心のふるさと・誇り／(観光)／ (情報発信)／(都市計画)
第3分科会	活気ある まちづくり	産業／(観光(主要産業として))／(文化・伝統(伝統技術))／(都市 計画)
第4分科会	人をつくる まちづくり	教育／地域づくり・コミュニティ／市民意識／(人材を生かす)
第5分科会	住みやすい まちづくり	安全・安心(安全・防災)／住環境／交通／生活環境／地球環境 / (都市計画)
第6分科会	市民と行政との まちづくり	行政運営／(人材を生かす)／(情報発信)

※()内のキーワードは、事務局が複数のテーマに関連すると判断したもの。

例)「観光」:奈良の主要な産業という面だけでなく、歴史・文化資源等の活用という面もあるため、第2分科会・第3分科会のキーワードとした。

「都市計画」:都市計画は様々な分野に関連するため、一つの分科会で都市計画を取り扱うのではなく、様々な分科会で都市計画に関連する議論ができるように、第2分科会・第3分科会・第5分科会のキーワードとした。

- ・「文化財」や「豊かな自然」という魅力の裏返しとして、開発が進まないという側面がある(第2分科会)
- ・世界遺産のバッファゾーン等の区域設定に都市計画が関連する(第2分科会)
- ・産業立地を考える際に、都市計画の種々の規制が関連する(第3分科会)
- ・交通網の整備等を考える際に都市計画が関連する(第5分科会)

2 各分科会が考えた「テーマ別将来像」

(1) 第1分科会（テーマ：生きやすいまちづくり）

■ テーマ別将来像 ■

いつまでも子や孫が笑顔で暮らせるまち

■ 背景(現状と課題) ■

● 少子高齢化の進行

- ・ 奈良市は、全国と同様、少子高齢化が進行しており、今後もこの傾向が続くことが予測されている。
- ・ このようなか、奈良市では平成 22 年 1 月現在の待機児童数が180人であるなど、子育て環境がまだ充分とは思われない。また、市民は保育所が少なく、保育料が高いと感じており、このままでは子どもはさらに減ってしまう。その結果、子ども同士の遊びが少なくなることで、健全な人間関係の形成の土台となる幼少期の体験の一つである同年代とのつながりが希薄になることが危惧される。これには、大人にとっても未来への希望をもてないという弊害がある。
- ・ 次代を担う子ども達が健やかに育つよう、子育て環境を整え、まち全体で子ども達の成長を見守っていく必要がある。
- ・ また今後、高齢化は一層進行すると考えられ、社会的支出となる医療費等を抑制していくためにも、歩きやすく自転車事故のない道や充実したバス交通などの、高齢者が元気で活動したり、働き続けることのできる環境づくりが必要である。
- ・ 上記の「子どもが健やかに育つ社会であること」、「高齢者が元気で活動し続けることができる社会であること」は、少子高齢化の時代に限らず「生きやすいまち」として必要なことである。

● 市民と行政の関係

- ・ 「自分達の提案が受け入れられない」、「行政と市民の間に壁がある」と感じている市民が多い。しかし、市民のなかには行政任せにしておきながら、「行政が悪い」と責任を押しつけているところもある。
- ・ 市民は自己責任において、強い者だけでなく、みんなが幸せになることを考えて行動することが大切であり、行政と市民との間にある壁(あると感じている壁)を取り除き、今まで以上に市民と行政が協力することが必要である。

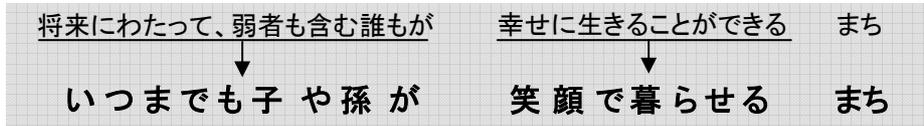
● 奈良市は平和の似合うまち

- ・ 奈良は、日本のはじまりの地と言われており、平和を象徴するまちである。平和は全ての命が肯定されるということであり、「生きやすいまちづくり」の根底に流れるものである。このため、平和をテーマにしたまちづくりを展開し、次代にもつなげていく必要がある。

■ このテーマについて私たちの考える将来像 ■

●「生きやすいまち」は、『いつまでも子や孫が笑顔で暮らせるまち』

- ・ 本分科会では、将来の奈良市は、弱者も含む誰もが幸せに生きることができるまち、つまり『いつまでも子や孫が笑顔で暮らせるまち』になることが望ましいと考えた。



- ・ 具体的には、「安全安心で命が大切にされている」「平和のネットワークがある」「市民自ら行動している」まちである。

①安全安心で命を大切にすまち

- ・ ここでは「子育て環境」「教育」「医療福祉」の3つの分野が考えられ、全体をとおして高齢者・子ども・障がい者等のあらゆる市民と一緒にいられる場所があり、穏やかに和気あいあいと交流している。
- ・ 子育て環境面では、小さな地域で保育の場があり、行政の垣根をこえた多様な保育が進められている。
- ・ 教育面では、教育関係のボランティア活動に多くの市民が参加し、外国人との言葉の教室などが開催されるとともに、教育が基本的権利として無料で受けられることが望ましい。
- ・ 医療福祉面では、定年で退職した市民は、専門的知識を活かして再就職したり、充実した社会基盤のもとで地域に社会貢献するなど活躍している。また、高齢者向け住宅や老人ホームなど住まいの選択肢が広がっている。さらに、医療費も無料化されていることが望ましい。

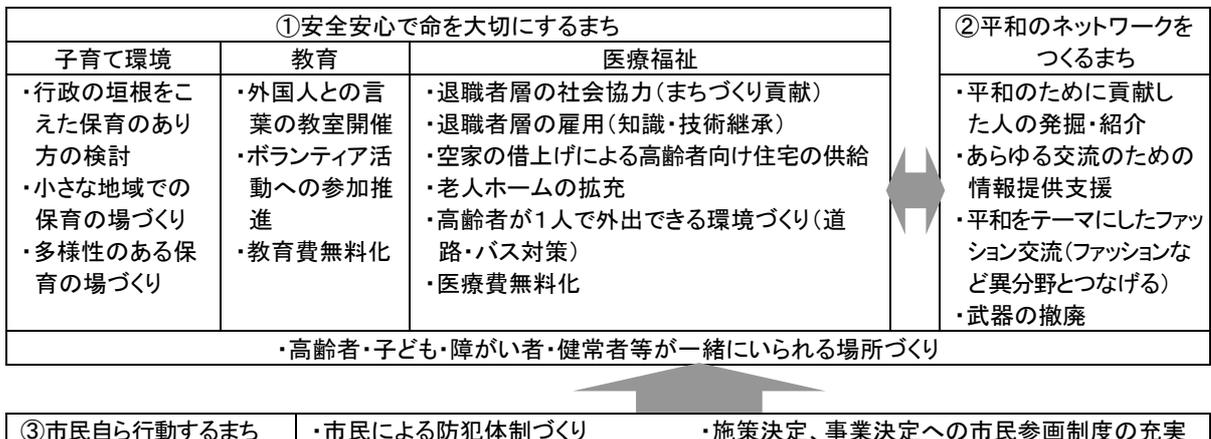
②平和のネットワークをつくるまち

- ・ 平和のために貢献した人が発掘・紹介されている。また、これらの人々の情報を含めたあらゆる交流のための情報を容易かつ的確に受発信できる。
- ・ 平和をテーマにしたファッション交流など多様な活動が展開され、武器も撤廃されている。

③市民自らが行動するまち

- ・ 行政任せではなく、地域の防犯体制が確立され、市民自らが安全の確保に努めている。
- ・ 施策・事業決定への市民参画の仕組みが充実しており、市民が行政と協働している。

【『いつまでも子や孫が笑顔で暮らせるまち』を実現するための取り組みアイデア】



(2) 第2分科会（テーマ：魅力を生かすまちづくり）

■ テーマ別将来像 ■

時を超えた歴史と自然を守り、活かし、伝えるまち

■ 背景(現状と課題) ■

●奈良市の魅力

- ・奈良市の大きな魅力は、1300年の間に蓄積されてきた歴史とその姿の一部を表すものとしての世界遺産をはじめとした歴史的建造物、埋蔵文化財やまちなみ、伝統的行事や、自然環境などがあることである。これらは奈良市だけではなく、日本、世界にとっても貴重な財産と考える。
- ・また目に見えるものだけではなく、先人がまち・施設の造営や行事などに込めてきた思い（おもてなしの心、平和への思い）や積み上げてきた歴史そのものも、大きな魅力である。

●奈良市の魅力を取り巻く問題

- ・しかし、これらの資源には、次のような問題がある。
 - i) 市内に“点”として存在し、お互いのつながりがわかりづらい、あるいは市全体としての魅力につながっていない。
 - ii) 交通条件などをはじめとして、市民や来訪者が、これら資源をわかりやすく知ることができるような環境が整っていないため、魅力が十分に伝わっていない。
 - iii) 時代とともに伝統行事や歴史的資源が失われたり、未だ魅力が認識されていないものもある。
- ・このような問題は、様々な要因が重なった結果、起こっていると思われるが、本分科会では、市民をはじめ全ての人が、今ある資源を当然のことと捉え、それに恩恵を感じていないことが大きな要因ではないかと考えた。
- ・このため、本分科会は、奈良市が将来「魅力が活かされたまち」になるためには、まちに魅力があふれているだけではなく、皆が魅力を知り、それを恩恵と感じていることが重要と考え、次のような将来像を設定した。

■ このテーマについて私たちの考える将来像 ■

●『時を超えた歴史と自然を守り、活かし、伝えるまち』とは

- ・本分科会では、将来の奈良市は、奈良市全体が魅力にあふれ『時を超えた歴史と自然を守り、活かし、伝えるまち』になることが望ましいと考えた。
- ・具体的には、市民、行政をはじめ学校や寺院・神社、事業者、各種団体など様々な人達の連携や専門的な組織による取り組みのもと「皆が魅力を知り、その恩恵を感じるまち」「まち全体が魅力にあふれる」まちになっている状態である。
- ・このようなまちが実現すれば、奈良市全体が魅力ある観光の舞台、豊かな暮らしの場となる。そして人々の心に奈良に行きたい、奈良に泊まりたい、奈良に住みたいという憧れの

念が生まれ、奈良市の大きな課題である人口の確保、産業の活性化、ひいては財政の健全化などにもつながると考える。

① 皆が魅力を知り、その恩恵を感じるまち

- ・ 古い文献や地図などの記録や専門家・外国人などの目を通して資源が再確認・再発見されている。そのことにより、先人がその資源をつくった際に込めた思いが読み取られ、市民がまちの魅力を知り、それを恩恵と感じている。
- ・ 奈良市の魅力が未来を担う子ども達にわかりやすく伝えられている。
- ・ 奈良市の魅力を知り、奈良市で暮らすことに誇りをもった市民が、情報発信・国際交流を積極的に行い、魅力が世界に広く伝えられている。

② まち全体が魅力にあふれるまち

- ・ 再確認・再発見された資源をその周囲も含め、守り、必要に応じて整備 (REデザイン) されてまちなみが整うなど、奈良市全体が魅力であふれている。
- ・ 目に見える資源だけではなく、先人の思いから心のあり方を学び、現在の形に置き換えることなどを通じて、市民が奈良市に住み働くことに誇りを持ち、訪れる人をもてなす心をもっている。

【『時を超えた歴史と自然を守り、活かし、伝えるまち』を実現するための主な取り組みアイデア】

まちの姿 2つの柱	①皆が魅力を知り、恩恵とを感じるまち	②まち全体が魅力にあふれるまち
取り組み 方向性	(知り)、伝える	守り、活かす
主な 取り組み アイデア	<ul style="list-style-type: none"> ・ 古い文献や地図(京北班田図など)から、各地域に眠る資源を再発見する ・ 専門家・外国人など、違う視点を通して魅力を再発見する ・ 昔のまちづくり、行事等から先人のまちに込めた思いを学ぶ ・ 奈良市の歴史を、物語性をもって伝える、特に子どもに教育する ・ 紹介看板・ビューポイント・観察の場をつくる ・ 歴史文化をわかりやすく紹介する施設をつくる 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 世界遺産をバッファゾーンも含め保全する ・ 世界遺産の追加登録 ・ 平城宮の復元や新薬師寺の発掘を行う ・ 自然の豊かさをまち全体に広げる(街路樹や各戸の緑化等) ・ 各寺院をつなぐ安全・快適な散策路を整備する ・ 古都保存法の遵守 ・ より良い自然景観やまちなみを守るため、宅地開発・土地利用・建物の規制をする ・ 夜間、商業系施設等の照明をやめる ・ 先人の暮らし方を学んで現在の形に置き換え実践する(環境に配慮した暮らし、もてなしの心)

■ 取り組みにあたって ■
 様々な人達(市民、事業者、学校、専門家、寺院・神社、行政、各種団体、外国人など)の連携と、専門的な組織の充実(行政の担当課、研究会など)

(3) 第3分科会（テーマ：活気あるまちづくり）

■ テーマ別将来像 ■

観光ビジネスモデルの創造による活気あふれるまち

■ 背景(現状と課題) ■

●活気あるまちづくりは観光の振興から

- ・ まちの活力と言える産業に関して奈良市をみると、自然や歴史に育まれた歴史遺産や住宅地の土地利用が主で、工業等の展開は困難なまちと思われる。
- ・ また、市民の多くは市外・県外に働き、外で稼いで外で使ってしまうっており、商店街をはじめとした市内の商業も衰退している現状がある。
- ・ 一方、奈良市は都がおかれてから1300年の歴史を持ち、豊かな自然を背景に、神社仏閣などの歴史文化遺産が豊富である。
- ・ このため、本分科会では、まちが活性化した活気あるまちづくりには、奈良市の最大の資源である歴史文化遺産を活かした「観光」の振興を図ること以外にはないと考えた。

●歴史遺産は第一級なのに、観光はそれを活かせていない

- ・ 歴史文化遺産は世界遺産をはじめ、日本の中でも第一級の本物であることは、奈良市内外にも知られている。
- ・ しかし、従来から「国際文化観光都市」を目指した取り組みが行われてきたにも関わらず、現状をみると、「宿泊者数は少なく」「夜は静かで」「若者の遊ぶところがない」など、経済の活力につながっていない。

●観光の真の産業化が必要である

- ・ 本分科会では、その原因が観光に対する「ビジネスモデル」が確立していないからではないかと考えた。歴史文化資産を活かし、生活環境を守りながら、経済の発展につながるようなあり方を「ビジネスモデル」として組み立て実践していくことが、観光の産業化＝地域の活性化につながると考える。

■ このテーマについて私たちの考える将来像 ■

●「活気あるまち」とするには観光ビジネスモデルの創造を行うこと

- ・ 本分科会では、将来の奈良市が活気あるまちになるためには、国政の成長戦略に連動した『観光ビジネスモデルの創造による活気あふれるまち』になることが望ましいと考えた。
- ・ 具体的には、「観光を基軸に活性化している」「観光が産業化している」まちである。そのまちの将来像は次のようなものである。

①観光を基軸に活性化しているまち

- ・ ヨーロッパの各国の現状に伺えるように、国内外の人が訪れ、観光地がにぎわうとともに、ならまち等でまちなみづくりが進み、奈良のメインストリートとしての三条通りを介してJR奈良駅前ともつながり、にぎわいの核が形成されている。

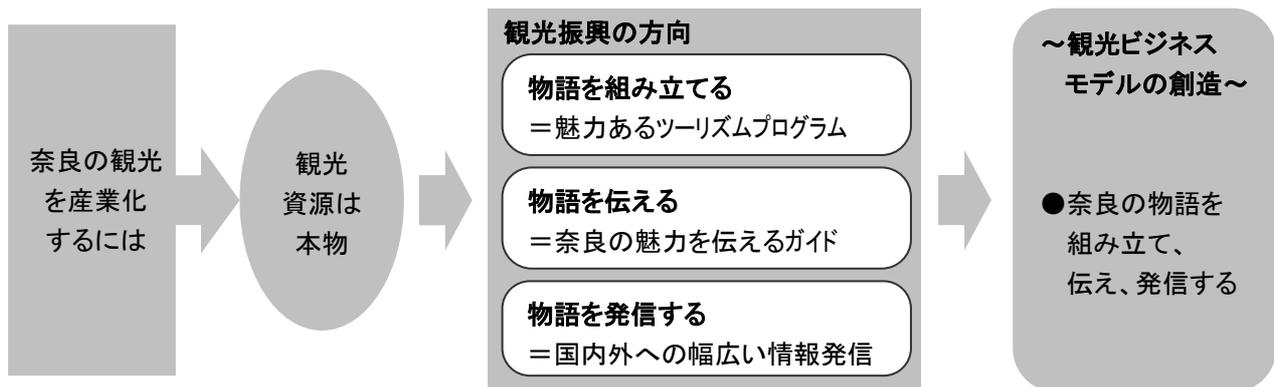
- ・地域の農産物や食品のブランド化、直売などにより、市民をはじめ来訪者による消費が進み、農業が産業として成り立っている。
- ・地域の工芸品や特産品の成り立ちや文化的価値が伝わり、土産や奈良観光の記念品として愛され、技術が継承されるほか、工業技術として成り立っている。

②観光が産業化しているまち

- ・ハワイ・グアム・東南アジアなどの観光地でみられるように、朝から夜(宿泊も含む)まで、地域(奈良)の魅力を満喫できるようなさまざまな魅力ある体験プログラムが構築され、国内外の人に利用されている。
- ・ヨーロッパ・中近東などの観光地でみられるように、地域(奈良)の物語を伝え、紹介するプロのガイドが職業として成り立つなど、観光を介した新しいビジネスが幅広く展開する。
- ・本当の奈良を知ることのできる物語が国内外に発信され、外国人や若者を含めた多くの観光客が訪れている。

【観光ビジネスモデルについて】

本分科会では、観光ビジネスモデルが確立していないことは、しっかりとした「ツーリズムプラン」がないことと考えた。その「ツーリズムプラン」の骨格に奈良の物語を紹介し、体験し、発信することが重要だと考えた。



- 基本的な体制整備(組み立て、実行する主体):ビジネスのプロの集団で構成される企画会社もしくは公社
- 物語を組み立てる(魅力あるツーリズムプログラム):「観光ツアー」の充実したプログラム、交通・寺社と連携した体験プログラム
- 物語を伝える(奈良の魅力を伝えるガイド):プロ、特に外国語ガイドの養成・充実
- 物語を発信する(国内外への幅広い情報発信):インターネットや市民目線による情報発信

【観光ビジネスモデルアイデア集】

ツーリズムプラン	情報発信	まちなみづくり	エコプラン	市民の役割
<ul style="list-style-type: none"> ・ツアーセットに交通・体験等を加味 ・ゴールドカード(交通無料パス) ・シルバーカード(修業認定証) ・多様な宿泊プランの組み込み(朝を大切に) ・設備投資なしのプログラム→夜:屋台・夜市、朝:朝市・散歩 ・若者プログラム 	<ul style="list-style-type: none"> ・情報発信に奈良のイメージ戦略→「祈りの奈良」など ・奈良の保有知識や財産の県外・国外への売り込み ・映像コンテンツの整備 ・若者プログラムの発信 ・海外への発信強化(外国語メディア) ・国際会議の誘致 	<ul style="list-style-type: none"> ・エコタウン・モデルタウンなど西部地域も含めて構築→奈良のまちのイメージづくり ・工芸村等の創出 ・大学との連携強化 ・西部地域の商業拠点化による観光との結合 ・歴史的まちなみ・通りの保存及び整備 ・コミュニティ民俗資源(講・伝統行事など)の活用 ・環境美化の推進 	<ul style="list-style-type: none"> ・観光に供する交通のエコ化→電気自動車、自転車など) ・エコ都市宣言・エコタウン創造 ・観光地のエコ化(ゴミ排出抑制、省エネ、バリアフリーなど) ・寺社等でのエコ生活体験プログラム ・観光公害の排除 ・環境の保全 ・観光化と市民の住みよい奈良を目指す 	<ul style="list-style-type: none"> ・市民目線の観光イメージづくり ・NPO等の民間活動の観光への参画・組み込み ・市民自らの多方面にわたる観光(奈良の魅力)発信 ・コミュニティレベルでの観光客受け入れ整備(中国での接待所、イギリスでのヘリテイジセンターなど) ・その他

(4) 第4分科会（テーマ：人をつくるまちづくり）

■ テーマ別将来像 ■

世代を超えて市民が力を出し合い、つながりを育むまち

■ 背景(現状と課題) ■

●社会的背景

- ・ 超高齢社会といわれるほど少子高齢化が急速に進み、今後もこの傾向はさらに進行すると予測されている。また行政運営では、人口減少や少子化により、将来の税収減少が必至である。

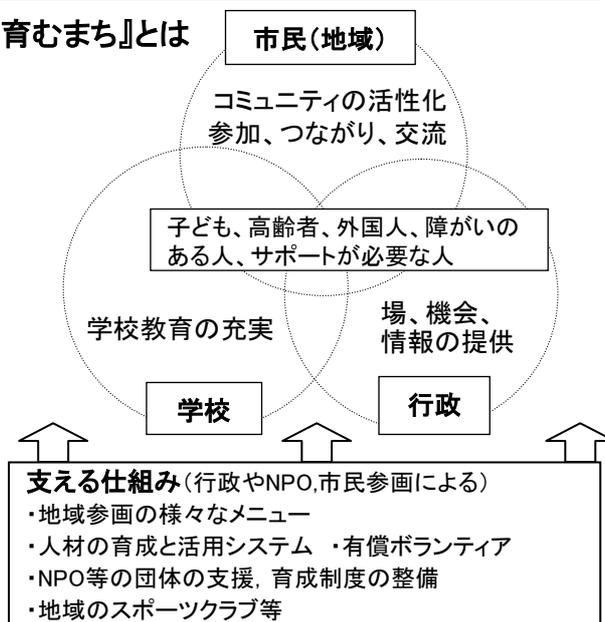
●地域・学校・行政の課題

- ・ 地域では、住民意識の変化により地域力が全般に低下し、相互扶助の精神が乏しくなり、孤立感をもつ住民もいると考えられる。また、若い世代や現役世代は、地域活動に関わる機会が少なく、地域の協力関係が弱まっている。
- ・ 学校では、教育課題の増加に対して教員等の配置が追いついておらず、校務が忙しくて教員に余裕がなく、子どもも時間に追われている。このため、教員と子どもの関係、子ども同士の関係が築きにくくなっており、現状の改善がなかなか進んでいない。また、地域と学校のつながりが希薄になりつつあり、地域からのサポートを十分に得られていない学校もある。
- ・ 奈良市は、財政状況が悪化しており、事業仕分けに見られるように公共サービス削減の方向に進みつつあり、今後は従来通りの公共サービスを提供できない恐れがある。また、同じ市内でも旧市街地域、住宅地域、農業地域など多様な地域があり、それぞれの特徴に応じた課題への対応が求められる。

■ このテーマについて私たちの考える将来像 ■

●『世代を超えて市民が力を出し合い、つながりを育むまち』とは

- ・ 本分科会では、将来の奈良市は、子どもから高齢者まで多様な世代が協力し合い、市民がまちづくりや子育て、福祉を担うまちになっていることが望ましいと考えた。それは、子ども、高齢者、障がいのある人、外国人など、日常生活でサポートを必要とする人々も安心して暮らせる社会である。
- ・ 本分科会では、このような姿を実現するには、市民(地域)・行政・学校が互いに補い合い、連携して取り組むことが必要であると考えた。



●地域のつながりを実感できるまち

- ・市民が自分の住む地域に愛着を持ち、自治会、行政、NPOなどが連携しあって地域の課題を解決しようと地域活動に取り組んでいる。
- ・子ども、若い人、高齢者、障がいのある人、外国人など、年齢・出身・障害の有無に関係なく、様々な人々がつながりあい、交流し、お互いに支えあうまちである。
- ・いつでも誰かに会える多世代交流拠点があり、スポーツなど生涯学習活動を通じ、あらゆる世代の市民が、交流できる機会や場がたくさんある。

●子どもを育むまち

- ・学校では、教職員がゆとりをもって配置されているため、子ども達と信頼関係を結べており、子ども達も基礎学力が十分に身につけている。また、体験に基づき考える力を育てる教育、地域に関心を持ち愛着を感じられる教育も行われている。
- ・住民だけでなく様々な人が「全ての大人が全ての子どもを育む」という意識で、有償ボランティアなどを通じ地域で学校を支え、子どもを社会の一員として育てている。
- ・親が安心して働けるために保育所・学童保育が整備されているだけでなく、全ての子どもが参加できる「子どもの居場所」がととのっている。

●市民が力を出し合えるまち

- ・市民の当事者意識が醸成される機会や情報が提供され、地域・まちづくり、教育の担い手が増えている。また、人材育成の場や育った人材が、活躍できる場が整えられている。
- ・市民がスポーツなど生涯学習活動に参加できる機会があり、それが市民の技術・知識の習得の場だけでなく、まちづくり、福祉、教育などについての意識を深め、市民活動につながる場にもなっている。

【『世代を超えて市民が力を出し合い、つながりを育むまち』を実現するための主な取り組みアイデア】

地域のつながりを実感できる	子どもを育む	市民が力を出し合える
<ul style="list-style-type: none"> ・廃止予定の施設や空き教室を地域拠点に活用 ・高齢者の社会参加の仕組みづくりと条件整備 ・地域で多世代が交流できるスポーツクラブを持てる制度などの検討 ・地域に若い世代が住みやすくなるために、家賃補助や住宅整備を進めるなど、多世代が混住できるような仕組みづくり ・学区ごとの福祉委員会制度の検討 ・分野別のリーダーの発掘 ・各組織、団体が連携できる拠点や場づくり ・グリーンサポート制度、アダプトプログラム推進事業の活用 ・あらゆる人が、日常的に交流できる楽しい行事や仕組みづくり 	<ul style="list-style-type: none"> ・公立学校の教育環境の向上と体制の整備 ・学校現場の声が行政に届く仕組みづくり ・小学校の英語専科教員の配置、小中学校の特別支援教員の増員 ・子どもが人間関係を構築できるように、ソーシャルスキルを学ぶ機会を確保 ・子ども自身が地域を考える子ども評議員制度の検討 ・学校支援協議会を設立し、地域で学校を支援する制度の検討 ・子育てについて、相談しやすく、助けあえる仕組みづくり ・放課後の子どもの居場所づくり ・奈良っこを育むプログラムづくり ・子どもの体力増進のために、スポーツの機会の確保・設備の整備 	<ul style="list-style-type: none"> ・中学校区単位の市民自治協議会の設立が可能な条例の検討 ・地域活動のための市民コーディネーターの育成 ・福祉分野での生活援助をはじめ、様々な分野で有償ボランティアを広く活用 ・小学校区ごとに、拠点とリーダー専任スタッフをおき、住民と地域づくりができる仕組みづくり ・育成された人材活用のために人材登録制度を充実 ・NPOなどの市民団体を育て、支援する仕組みづくり ・市民が市政の担い手であることを意識できるような仕組みづくり ・市民が市域全体で対話できる場づくりの検討 ・プロサッカーチームなど市民が一体となれるスポーツの振興

(5) 第5分科会（テーマ：住みやすいまちづくり）

■ テーマ別将来像 ■

歴史と未来、都市と田園が共生する奈良

■ 背景(現状と課題) ■

●「住みやすさ」の基本的な要素

- ・「住みやすさ」といえば、一般的に居住性や利便性、安全・安心などを思い浮かべがちである。
- ・しかし、本分科会では、これらの側面だけでなく、まちが「地区ごとに個性的で美しく」、「歴史遺産や自然が大切にされ」、「市民が奈良に誇りをもてる」ことも「住みやすさ」の基本的な要素であり、そして何よりも、まちの望ましい状態が実現するだけでなく、破綻せず未来世代へ引き継がれること(持続可能なこと)が大切であると考えた。

●持続可能なまちをつくるためには、まず環境共生のまちづくりが必要

- ・近年、地球温暖化が人類の未来を脅かす重要な問題として広く認識されるようになってきている。また地域レベルでは、自然破壊や水質汚染など地域環境の質的低下が懸念される。真に「住みやすいまち」の実現には、環境負荷を減らし、人工的な存在の「都市」と自然的要素に富んだ「田園」が調和し共生する「環境共生」のまちづくりを展開していく必要がある。

■ このテーマについて私たちの考える将来像 ■

●『歴史と未来、都市と田園が共生する奈良』とは

- ・本分科会では、将来の奈良市は、過去・現在・未来の継続性「持続可能性」(時間軸)を重視し、その実現のため、人工と自然が調和した「環境共生」の概念(空間軸)を包め、『歴史と未来、都市と田園が共生する奈良』が望ましいと考えた。さらに、奈良市全体の将来像としては、より簡潔な表現『持続可能な環境古都・奈良』を提案した。
- ・その基本には、「都市は先人からの遺産、未来世代からの預かりもの」という考えがあり、持続可能性をより明確に認識するため、環境・文化・社会・経済に区分して整理した。すなわち、「環境的持続可能性」、「文化的持続可能性」、「社会的持続可能性」及び「経済的持続可能性」の切り口からまちづくりを捉えた。なお、「経済的持続可能性」については、第3及び第6分科会からの提案を待つこととし、本分科会からの具体的提案はない。

①環境的に持続可能なまち『人工と自然の調和』

- ・現状の市街地をこれ以上拡大させず、ストックを生かしながら再整備し、歩行者主体の公共交通システムを整えマイカー依存から脱することで、環境と共生する「コンパクトシティ」が形成されている。
- ・都市の活動や生活に必須のエネルギー源には、太陽光・太陽熱などの再生可能エネルギーが積極的に活用され、特に地場林業活性化にも役立つ木質バイオマスの利用が推進されている。

②文化的に持続可能なまち『土地・時間・人がつくる価値の向上と継承』

- ・この土地で、長い時間をかけて、先人達が築きあげてきた奈良市の独自性が尊重されている。
- ・歴史的まちなみが保全され、「懐かしい未来」を感じることができるとともに、地区ごとの特徴・個性が活かされたまちづくりが進み、今は見苦しい街路景観も改善され、市民の誇り(シビックプライド)が確立されている。

③社会的に持続可能なまち『多様な人々の関係性の展開・継続』

- ・生まれ育ち老いて死ぬまで、あらゆるライフステージに対応して多様な人々が安心して暮らせ、まちと家は世代を超えて住み継がれている。
- ・防災安全と地域で支える安心・福祉が充実し、都心と里山をはじめとした多様で活発な地区間交流が展開されている。

【『歴史と未来、都市と田園が共生する奈良』を実現するための主な取り組みアイデア】

①環境的持続可能性 環境共生型「コンパクトシティ」	②文化的持続可能性 美観、特徴・個性、落ち着き、誇り	③社会的持続可能性 安心・安全、生涯対応、交流
<ul style="list-style-type: none"> ・公共交通システム等の充実 (マイカー規制、歩道・自転車道の整備、LRTの導入) ・市街地の拡大規制 (逆線引き、ダウンゾーニング、新築抑制と建物ストック活用、地区計画による建物形態規制、大規模SC出店規制) ・CO2排出削減と再生可能エネルギー活用 (省エネルギー、木質バイオマス、太陽光発電、太陽熱、ミニ水力発電、ミニ風力発電) ・上下水・廃棄物の適正処理と循環 	<ul style="list-style-type: none"> ・美しい景観形成 (歴史的まちなみ保存、無電柱化、街路樹の適正管理＝丸刈り中止、高層建築物の規制、屋外広告物規制、建築物・工作物色彩等の規制) ・地区の特徴を生かしたまちづくり (世界遺産周辺地区、ならまち界隈、西部地域の新興住宅地、東部地域の里山地区、幹線道路沿道地区など) ・懐かしさ、落ち着きを活かしたまちづくり (遅れていることがアドバンテージ) ・市民の誇り(シビックプライド)の醸成 	<ul style="list-style-type: none"> ・防災安全のまちづくり ・地域が支える福祉・安心のまちづくり (ユニバーサルデザイン) ・多様なライフステージに対応できるまちづくり (子育てしやすい、働きやすいまちづくり) ・市街地部と里山などの地区間交流 (食住近接、エコシティ・エコビレッジ、緊急時援助)

注) LRT・・・Light Rail Transitの略。次世代型路面電車システムを指す。

※詳細は、テーマ別将来像付属資料『歴史と未来、都市と田園が共生する奈良』の背景・方向性・対処方策一覧表をご参照いただきたい。

(6) 第6分科会（テーマ：市民と行政とのまちづくり）

■ テーマ別将来像 ■

市民と行政が協働する、健康的な財政によるまちづくり

■ 背景(現状と課題) ■

●財政の健全化の必要性と課題

- ・ 奈良市の平成20年度末債務残高は約3,141億円で、一世帯あたりの借入金残高は約207万円の換算になり、厳しい財政状況が続いている。（「奈良しみんだより」平成21年11月号より）
- ・ 私たちは、次代を担う子どもたちがのびのびと遊び、家族や地域のなかで生き生きと生活することができる環境を整えたいと願っても、その実現がままならないなどの厳しい財政事情に直面するなか、大きな危機感を持たざるを得ない。
- ・ 行政にあつては、「奈良市行財政改革大綱」（平成16年策定、18年2月改訂）に基づいて、財政の健全化を強力に進める必要がある。
- ・ また、市民意識からみて多くの“無駄”が認められる行政機構が、民間の感覚を取り入れ改善・改革に取り組んでいくにあたっては、行政職員の一人ひとりの意識改革が必要である。

●市民と行政の協働の意義と課題

- ・ 奈良市の状況から、市民(住民)、企業(事業者)、行政といった、あらゆる主体が奈良市の明るい未来を切り開いていくためには、次のことを目指す必要がある。
 - 市民は、要求・批判・評論の域に止まることなく、主体的に自らの幸せと公共の利益を真剣に考えていく
 - 行政は、職員に市民(民間)感覚を浸透させ、健全な財政と効率的な行政運営を実現する
 - 企業は、自らの事業目的を追求しつつ奈良市のまちづくりにどのように貢献するかを考え実践していく
- ・ また、企業は利益の確保を大きな目標とする団体であることから、市民と行政が“協働”することは必要不可欠である。また、定数問題ほか市議会のあり方も絶えず議論・検証する必要がある。
- ・ なお、市民と行政が真の意味で相互理解していくためには、「市民」と「行政」を対立的なものとして理解することから、“協働”という視点で対処することに切り替えることが必要であると思われる。

■ 私たちの考える奈良市テーマ別将来像 ■

●『市民と行政が協働する健康的な財政によるまちづくり』とは

- ・ 本分科会では、将来の奈良市は、借金がない(あっても少ない)「健康的な財政」のもとで

未来に向けたまちづくりが展開される『市民と行政が協働する、健康な財政によるまち』になることが望ましいと考えた。

- ・ 具体的には、「まちづくりのあらゆる主体が協働する」「健全な財政が維持できる」まちである。
- ・ そして、その目指す先は、世界に誇る奈良の文化を未来に引き継ぎ、生かすとともに、奈良のまちを世界に開かれた、多様性に富み、持続的発展が可能な住みよいまちにすることである。

①まちづくりのあらゆる主体が協働するまち

- ・ まちづくりの主体として、「市民」、「地域の自治会やNPO法人などの市民公益活動団体」、「事業者(企業)」、「学校」、「行政」を位置づける。
- ・ 市民、市民公益活動団体、事業者及び学校は、主体的、積極的に公益活動を推進している。
- ・ 市民、市民公益活動団体、事業者、学校及び市が対等な立場で、互いの特性を尊重し認め合い、企画立案の過程から実施及び評価に至るまで、協議を重ね、共通の目的である公共的な課題の解決のため共に取り組んでいる。
- ・ 市民は市政に主体的に参画し、行政は、積極的に市民の参画を受入れ、すべての主体が互いの立場及び役割を確認し、尊重しあいながら協働している。

②健全な財政が維持できるまち

- ・ 債務がなく、未来を描くために必要な投資が適切に実行できるまちになっている。
- ・ 行政は、投資に必要な資金の調達も、より条件のよいものを選択するとともに、無駄の排除や金利の交渉、保有資産の処分なども含めた工夫に努めている。
- ・ 市民は、財政に関する知見を深めるとともに、まちづくりを通じて、できるだけ少ない費用で社会基盤を維持、活用することに努めている。
- ・ 行政は、財政に関する広報を進め、情報を積極的に公開している。

3 奈良市全体の将来像

(1) 「奈良市全体の将来像」を考えるための様々なキーワード

第6回会議において、事務局から委員に対して「奈良市全体の将来像」を考えるためのキーワードが紹介された。

まず、重要なキーワードとして、各分科会の考えた「テーマ別将来像」がある。分科会のテーマは市の現状を様々な角度から切り分ける中で生まれたものであるため、「市全体の将来像」は「テーマ別将来像」を包含するものだとも言える。

次に、第4次総合計画策定の基礎調査の一環として平成20年度に市が実施した「市民アンケート」と「中学生アンケート」の集計結果がある。ここでは、「奈良市がどのような市になることが望ましいか」という問いを設け、14の選択肢の中から3つまで選択する形で回答を得た。年代によって順位に違いはあるが、多くの年代で「文化財を保護し、歴史の風格を保有する歴史都市」、「交通事故・犯罪・公害・災害のない安全・安心な都市」、「観光者などが訪れる魅力ある観光都市」が上位3位を占めている。

さらに、奈良市都市経営戦略会議の「奈良市次期総合計画策定の方針に関する報告書」(平成21年3月)で提示されたキーワードがある。この報告書は、奈良市次期総合計画策定の方針について、外部の有識者で構成される奈良市都市経営戦略会議が討議を重ねた結果をとりまとめたものであり、この中で「奈良市の目指すべき新たな都市像を考えるにあたり重要なキーワード」として「奈良の魅力を前面に打ち出し、アピールするためのキーワード」、「奈良市が取り組むべき方向性を示すキーワード」、「市民を主眼に置いた市政運営のキーワード」の3つに区分された19個のキーワードが提示されている。

なお、参考として、奈良市の過去の総合計画における将来都市像や、奈良市に接する近隣4市(生駒市、大和郡山市、天理市、木津川市)、近畿圏の中核市4市(高槻市、東大阪市、姫路市、西宮市、和歌山市)、奈良市と人口がほぼ同規模(±1万5千人)の中核市の総合計画における将来都市像も紹介された。

(2) 各分科会の考える「奈良市全体の将来像」

(1)で挙げたキーワードや、各委員が予め考えた「市全体の将来像(案)」を参考に、各分科会で「市全体の将来像(案)」を検討した。

なお当初は、各分科会の案を集約したものを、奈良市まちづくり市民会議の「市全体の将来像(案)」として提案する予定であったが、以下の理由により、委員の意見を最大限尊重するため、各分科会の考えた「市全体の将来像(案)」6案を奈良市まちづくり市民会議の「市全体の将来像(案)」として提案する。

- 各分科会が「市全体の将来像(案)」を考えた際の着眼点がそれぞれ異なっており、各案の集約のためには十分な議論が必要と思われたこと
- 一方で、奈良市まちづくり市民会議には委員全員で「奈良市全体の将来像(案)」の集約について議論する時間が残されていなかったこと

今後は、奈良市総合計画策定委員会や奈良市総合計画審議会が基本構想素案を検討する中で「市全体の将来像」の議論を引き継ぐことになるが、これら6つの案に込められた各分科会・委員の思いをしっかりと受け止めていただきたい。

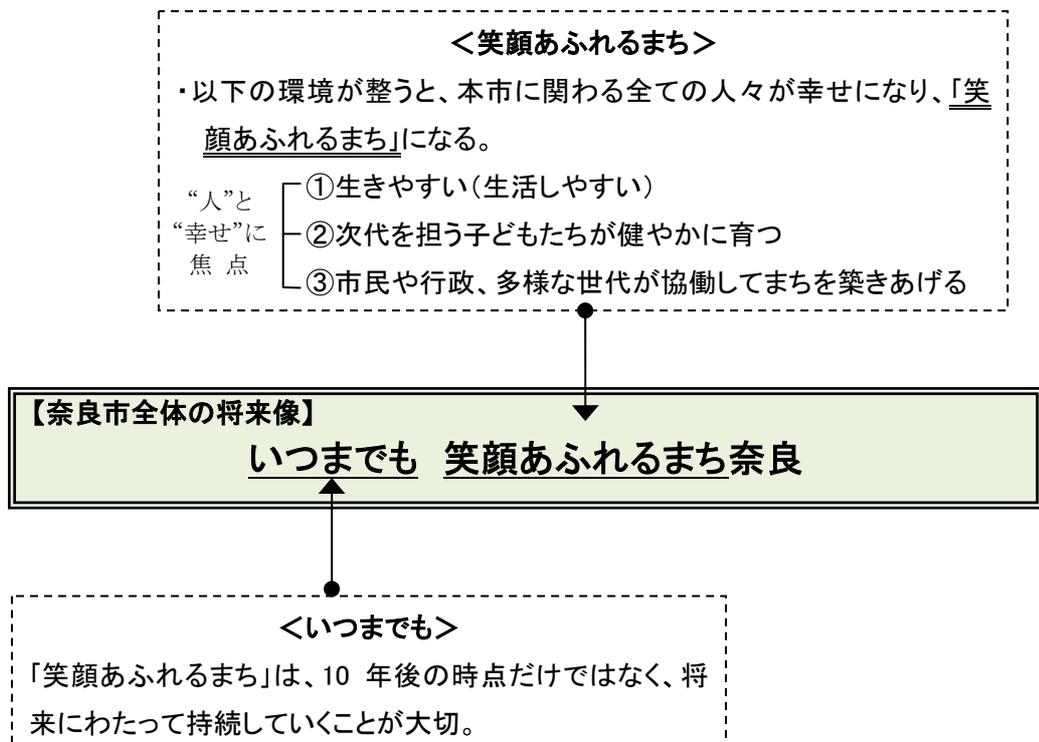
①第1分科会

■ 奈良市全体の将来像 ■

いつまでも笑顔あふれるまち奈良

■ 背景(奈良市全体の将来像の設定根拠) ■

- ・ 本分科会では、本市に関わる人々が幸せに暮らすために本市がどのようなまちづくりをすればよいかを検討し決定する際には、“人”と“幸せ”に焦点をあてて、奈良市全体の将来像を描くことが望ましいと考えた。また、誰もが納得でき、目指したくなるような将来像になるよう、こころがけた。
- ・ 将来、本市に関わる人々は生きやすく(暮らしやすく・生活しやすく)、次代を担う子どもを育てる環境が整っており、市民と行政等が協働してまちをつくりだしている。このようなまちになれば、本市に関わる人々は幸せになり、まちじゅうが笑顔であふれる。
- ・ また、このような状態は、10年後(第4次総合計画の目標年次)の時点だけではなく、できる限り早く実現し、そして将来にわたって「いつまでも」続くことが重要である。
- ・ 以上を踏まえ、本分科会では、奈良市全体の将来像を「いつまでも笑顔あふれるまち奈良」とした。



②第2分科会

■ 奈良市全体の将来像 ■

はじまりの都—世界あこがれの都市へ^{まち}

■ 背景(奈良市全体の将来像の設定根拠) ■

- ・ 本分科会では、奈良市独自の特徴がわかり、かつ中学生でもわかりやすいような表現、コンパクトな表現になるよう、こころがけた。
- ・ 奈良市では古くは平城京が築かれ、多くの寺社や寺院が建設されるなど、日本人の心の源(みなもと=はじまり)となるような歴史文化遺産や風景が数多く残されている。また、現在、本市は「国際文化観光都市」を掲げているが、平城京では天平文化が花開き、国際交流都市として大きく発展したと言われており、奈良市の源(みなもと=はじまり)となっている。
本分科会では、これらの特徴を踏まえ、奈良市の今までの姿を「はじまりの都」と表した。
- ・ このような本市が、今後も様々な取り組みにより、奈良市全体の魅力が向上し、将来は、日本はもとより、世界からあこがれを抱かれるような国際都市に発展していることが望ましいと考えた。
- ・ 以上を踏まえ、本分科会では、奈良市全体の将来像を「はじまりの都—世界あこがれの都市へ」とした。

【奈良市全体の将来像】

はじまりの都—世界あこがれの都市へ^{まち}

＜奈良市とは=はじまりの都＞

今までの奈良市

- ・ 日本人の心の源(みなもと=はじまり)
 - ・ 国際文化観光都市としての発展の源(みなもと=はじまり)
- =「はじまりの都」と考えた。

“奈良市固有の特徴を表現”

〔奈良市独自の特性を端的に表現〕

＜将来の姿=世界あこがれの都市＞

- ・ まちの魅力が向上して、日本だけではなく、世界からあこがれを抱いてもらえるような国際都市

“将来の奈良市の、日本や世界からの位置づけを表現”

〔将来の奈良市が、日本や世界からどのような都市と見られたいかをわかりやすく表現〕

【参考】

平城京は、日本独自の文化が形成され、国際交流が大きく発展し、その存在が世界に大きく認められた。このような観点から、実質的な日本のはじまりの都と捉え、将来像を「日本はじまりの都—世界あこがれの都市へ」とした方が、よりわかりやすいという意見もあった。

一方、日本最初の都は藤原京という通説があることから、“はじまりの都”という言葉を使わない将来像が望ましいという意見もあり、「はじまりの都—世界あこがれの都市へ」に代わる将来像として、以下の2案が提案された。

- ・ 「世界に誇る、歴史・文化・自然を活かす、豊かなまち 奈良」(奈良市の特徴である、世界に誇れるような歴史・文化・自然という遺産を活かしながら、人々が豊かに暮らせるようなまち)
- ・ 「ゆったりと時の流れをつむぐ都市」(歴史という時の流れにより、蓄積されてきた資産を、将来にもつむいで[継承して]いくまち。“ゆったりと”は、奈良市の雰囲気にあっている)

③第3分科会

■ 奈良市全体の将来像 ■

ならタイプ
NARRATIVE・奈良 ～悠久の物語を伝えるまち～

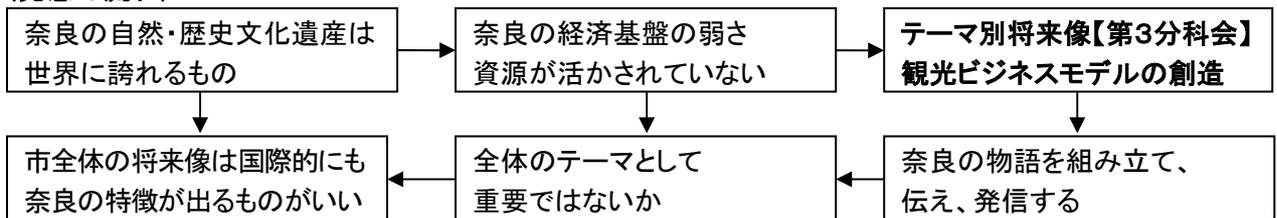
ならタイプ
NARRATIVE = (奈良市の)物語を伝える

■ 背景(奈良市全体の将来像の設定根拠) ■

- ・奈良市には、本物である歴史・文化・自然資産が豊富である。これらは過去のものではなく、生きた資産として将来にも引き継がれるべきである。
- ・また将来の人々の姿について視点を向けると、市民が夢を抱き、市民や来訪者にとっても過ごしやすいまちをつくりあげ、さらに次代の子ども達にもつなげていることが望ましい。
- ・このようなまちが築かれるためにも、本市の経済発展が必要であるが、奈良市の財政基盤は脆弱で、多くの債務を抱えているという現状があり、このままでは、貴重な歴史文化遺産すら守れないという事態が憂慮される。
- ・したがって、観光産業の活性化によって、市民と市の財政基盤を確立し、歴史・文化に恵まれた環境を守り、世界に誇れる「奈良」が確立されると考えた。
- ・以上が実現されるには、豊かな生きた資産を活用しながら、本市が人々に語られるべき価値をもつまち、物語に富むまちになり、世界や未来の子どもたちに広く伝えられていることが重要であると考え、奈良市全体の将来像を「NARRATIVE・奈良」とした。
- ・なお、「NARRATIVE」とは、英語で「物語」を意味するが、「NARA(奈良)」と「NARRATIVE(物語、物語ること)」の音の反復性を活かし、「悠久の奈良市の物語を伝える」という意味を込めたものである。

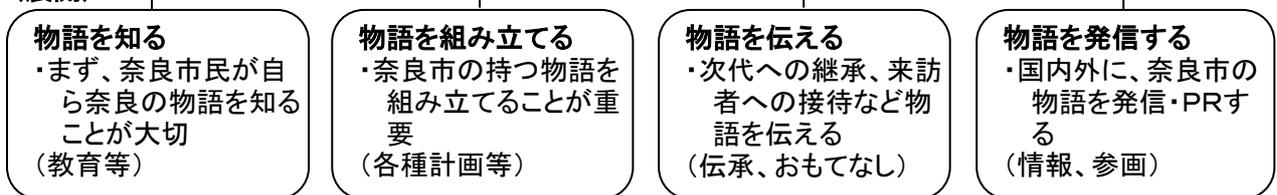
【発想の流れと展開】

(発想の流れ)



【奈良市全体の将来像】
NARRATIVE・奈良 ～悠久の物語を伝えるまち～

(展開)



④第4分科会

■ 奈良市全体の将来像 ■

世代を超えて力を出しあい未来につなげる古都奈良

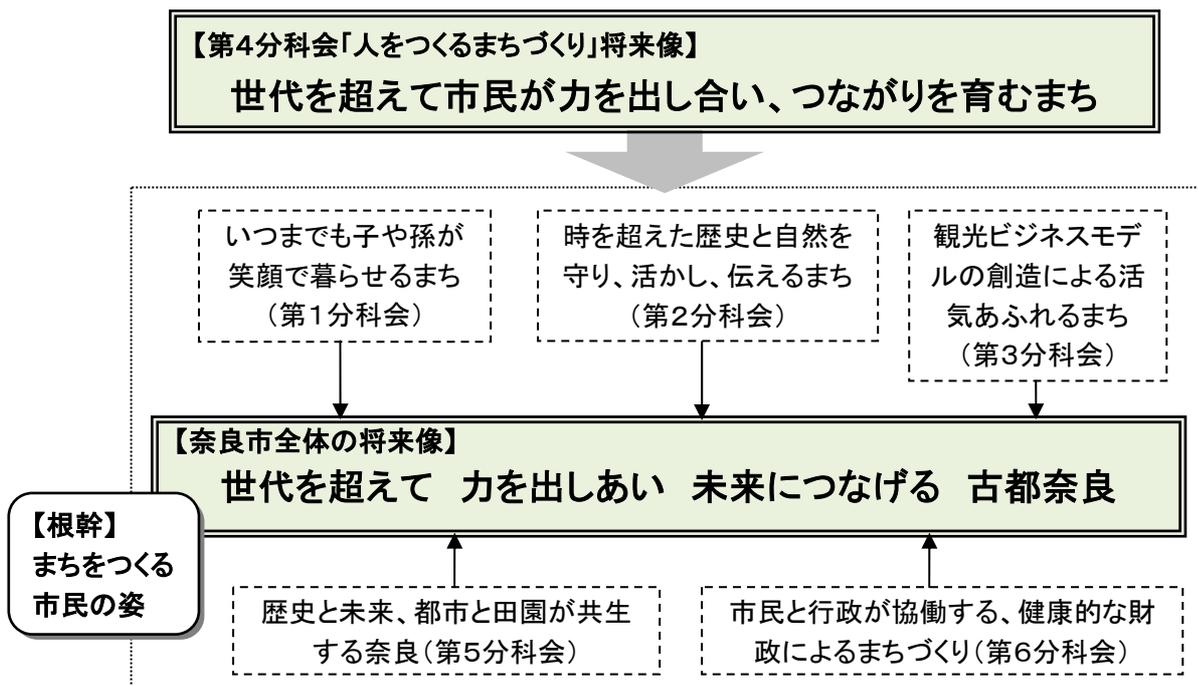
■ 背景(奈良市全体の将来像の設定根拠) ■

- ・ 奈良市の将来像について、市民意識調査では、上位 6 位が 7 位(14.6%)以下を大きく引き離しており、市民は以下のような姿を望んでいると考えられる。

1位	文化財を保護し、歴史の風格を保有する歴史都市	(55.1%)
2位	子どもやお年寄り、障がい者などにやさしい福祉都市	(42.0%)
3位	自然環境を保護し、公園や街路樹などの緑豊かな都市	(39.9%)
4位	観光客などの訪れる魅力ある観光都市	(36.6%)
5位	交通事故や犯罪並びに公害、災害のない安全・安心な都市	(35.4%)
6位	都市施設が整い、暮らしやすい生活都市	(31.0%)

(奈良市民意識調査「問1 将来の奈良市の望ましい姿(複数回答による点数値)」平成21年8月実施より)

- ・ このような都市像の実現には、あらゆる世代の市民が力を出し合い、助け合う姿勢が大切である。市民が、未来に夢と希望を持ち、先人から受け継いだ古都奈良を、次の世代につなげていく。本分科会は、このような市民の姿が、奈良市全体の将来像を支える根幹をなすと考え、「世代を超えて力を出しあい未来につなげる古都奈良」とした。
- ・ なお、この将来像は、各分科会によるテーマ別将来像を考慮している。



⑤第5分科会

■ 奈良市全体の将来像 ■

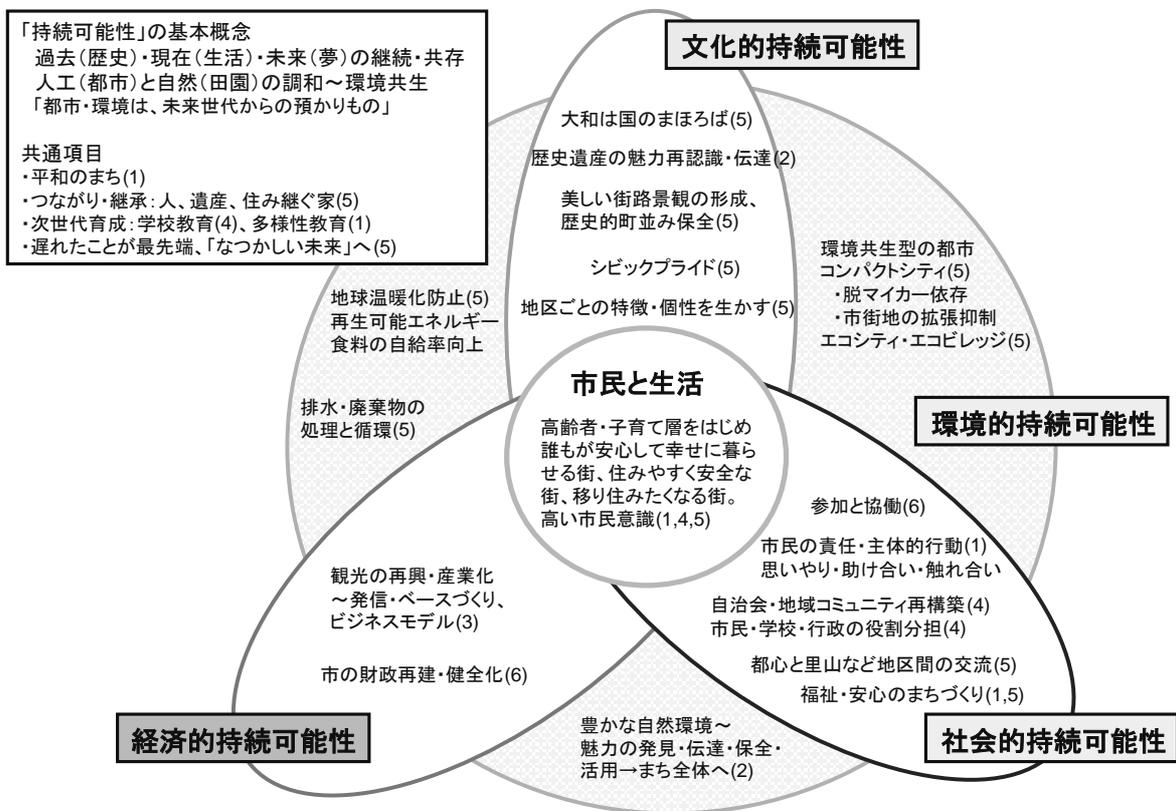
持続可能な環境古都・奈良

■ 背景(奈良市全体の将来像の設定根拠) ■

- ・ 本分科会は、テーマ別都市像として、過去・現在・未来の継続性「持続可能性」(時間軸)を重視し、その実現のため、人工と自然が調和した「環境共生」の概念(空間軸)を包め、『歴史と未来、都市と田園が共生する奈良』が望ましいと考えた。これを踏まえ、奈良市全体の将来像としては、より簡潔な表現『持続可能な環境古都・奈良』を提案した。
- ・ その概念をより把握しやすくするため、他の分科会からの提案(途中段階のキーワード)も含め、概念図として模式化したものが下の図である。
- ・ その趣旨は、提案されたキーワードの位置づけ・相互関係を確認しようとするものである。整理の手法としては、持続可能性を環境・文化・社会・経済の側面に区分し、環境的持続可能性を包括的な基盤として背景に、他側面の持続可能性を3方向に、全ての要素が重なり合う中央に市民と生活を配置する。

【奈良市全体の将来像『持続可能な環境古都・奈良』の概念図】

()内数字は分科会番号



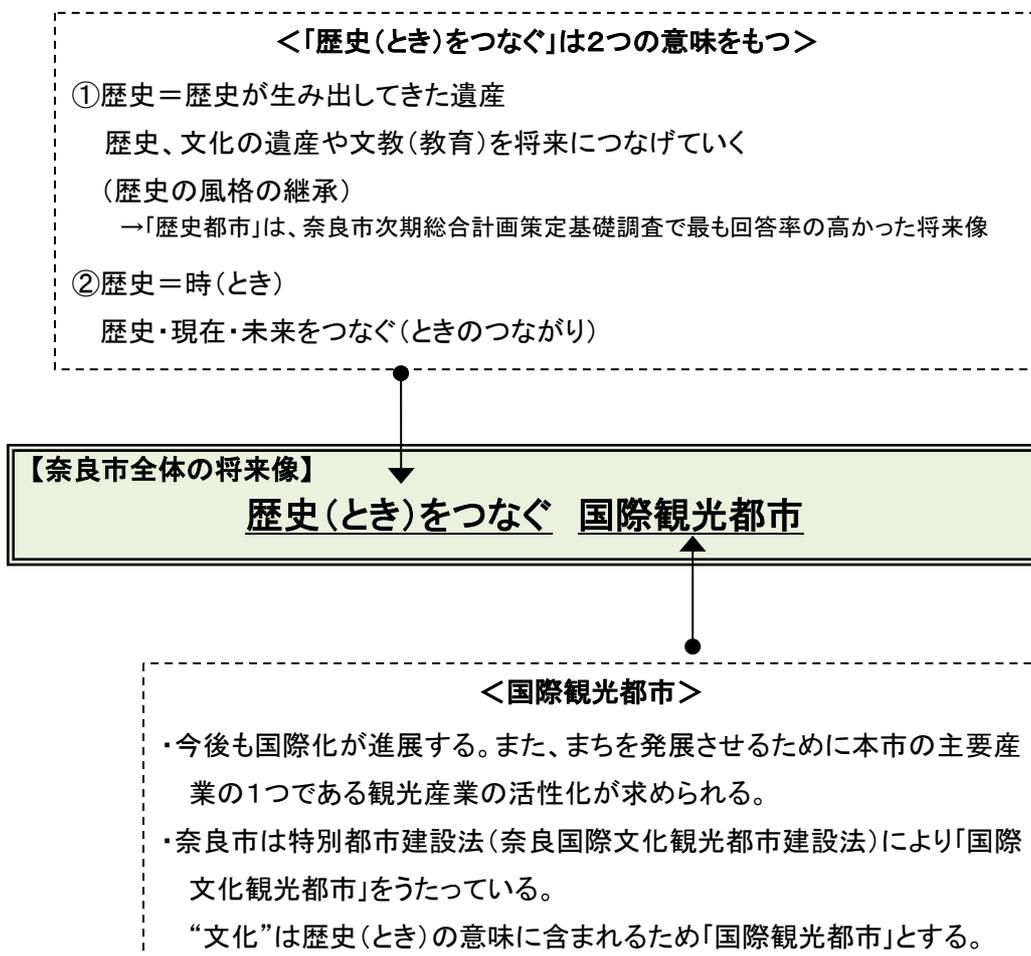
⑥第6分科会

■ 奈良市全体の将来像 ■

歴史(とき)をつなぐ国際観光都市

■ 背景(奈良市全体の将来像の設定根拠) ■

- ・ 本市は歴史・文化に関わる遺産が多く、これらは将来にわたって引き継がれていくべきものである。昨年度実施された奈良市次期総合計画策定基礎調査(アンケート調査)結果でも、奈良市の望ましい将来像として「文化財を保護し、歴史の風格を保有する歴史都市」と回答する市民が最も多かった。
- ・ 本分科会では、本市は、歴史・文化といった遺産が未来に引き継がれていくとともに、作法や品格の備わった文教都市としても発展していることが望ましいと考えた。
- ・ また本市は、特別都市建設法(奈良国際文化観光都市建設法)により「国際文化観光都市」を掲げており、今後も国際化の進展、主要産業の1つである観光産業の活性化により、日本を代表するような国際観光都市となるべきだと考えた。
- ・ 以上を踏まえ、本分科会では、奈良市全体の将来像を「歴史(とき)をつなぐ国際観光都市」とした。



4 将来像の実現に向けて（参考意見）

奈良市まちづくり市民会議では、市全体の将来像と、まちづくりのテーマごとの将来像を考えてきた。これらの将来像は、ただ語るだけでは実現できない。将来像を実現するためにできることを考え、積極的に行動することにより、将来像は私たちの手に届くものとなる。

奈良市まちづくり市民会議は将来像を検討する場ではあったが、それでも多くの委員が「将来像を実現するために何をすべきか、具体的な方策を考えたい」という思いを持っていた。また、委員の中からは、「行政だけに頼るのではなく、市民自ら積極的に動くことが必要だ」という意見も出ていた。

そこで、将来像の実現のために、市民が参加する実行組織や、市民の目で事業の進捗をみとどける組織を設立することをあわせて提案する。

この組織には、市内の各地域の人々が参加することができる。そして、市行政の行動をただ待つのではなく、よりよいまちづくりを実現していくため、自ら提案し、積極的に行動する。その過程で、市民の熱意が行政を動かすこともあるだろう。また、市民と市行政が連携することにより、それぞれが単独で行動するよりも良い結果を生むこともあるだろう。

奈良市のこれからのために、市行政がぜひこの提案を受け入れ、市民とともにまちづくりを進めていくことを願う。

『4 将来像の実現に向けて（参考意見）』について

ここに記したのは、奈良市まちづくり市民会議の委員が、テーマ別将来像や市全体の将来像を分科会ごとに検討するなかで、これらの将来像を実現するため、ぜひ市民として参画していきたいという思いから生まれた意見である。

会議全体での十分な議論を経していないため、参考意見とするが、この意見の趣旨に賛意を示した委員が全体の半数近くを占めたことを申し添える。

参考資料

(1) 奈良市まちづくり市民会議委員名簿

【凡例】奈良市まちづくり市民会議の代表◆、分科会の代表◎、分科会の副代表○
 (分科会の副代表については、必要と判断した分科会のみ選出)

分科会	氏名
第1分科会	◎井上 雅由
	木村 宥子
	熊野 磯一
	田中 浩
	本間 香貴
	吉住 秀
第2分科会	上野 登統
	榎本 正範
	小西 完治
	◆◎澤崎 嘉造
	谷 幸三
	中川 徹
	橋本 光男
	濱 朝子
	春田 稔
山本 善徳	
第3分科会	赤尾 隆
	阿部 智子
	佐藤 正幸
	新堂 順規
	○友田 達郎
	長谷川 庸司
	◎畑中 忠司
	松森 重博
	吉田 俊夫
	○寮 美千子

分科会	氏名
第4分科会	アダルシュ シャルマ
	○岡本 胤継
	奥村 麻希子
	北 良夫
	小島 道子
	◎笹部 和男
	高松 典正
	宮本 郁江
	森口 哲也
○山本 素世	
第5分科会	北浦 由香
	北野 剛人
	サマン ペレラ
	四反田 喬典
	田北 ますみ
	反田 博俊
	中西 輝
	濱 恵介
◎松永 洋介	
第6分科会	植田 正博
	武村 俊宏
	多田 充朗
	田中 保夫
	◎村田 勝彦
	元島 満義
	渡邊 新一

(2) 奈良市まちづくり市民会議検討経過

<奈良市まちづくり市民会議開催状況>

開催年月日	会議名	主な議題
平成21年 10月 9日	第1回 会議	<ul style="list-style-type: none"> ・市長あいさつ ・奈良市第4次総合計画の策定について(事務局説明) ・奈良市まちづくり市民会議の役割について(事務局説明) ・グループワーク『会議のルールについて』 ・奈良市の現況について(事務局説明)
平成21年 11月 6日	第2回 会議	<ul style="list-style-type: none"> ・本会議の位置づけと運営について(前回の質問等への回答を含む) ・前回のグループワークの振り返り(会議のルールの確認) ・グループワーク『奈良市の魅力と悩みを考えましょう。』 ・全体まとめ
平成21年 11月27日	第3回 会議	<ul style="list-style-type: none"> ・前回の振り返り(分科会テーマの最終確認) ・分科会設置及びメンバーの決定 ・グループワーク(分科会ごと)『奈良市のテーマ別将来都市像づくり(1)』
平成21年 12月18日	第4回 会議	<ul style="list-style-type: none"> ・奈良市まちづくり市民会議からの提案書について(事務局説明) ・グループワーク(分科会ごと)『奈良市のテーマ別将来都市像づくり(2)』 ・各分科会の中間発表
平成22年 1月15日	第5回 会議	<ul style="list-style-type: none"> ・奈良市勢の概要について(事務局説明) ・グループワーク(分科会ごと) <ul style="list-style-type: none"> (1)『奈良市のテーマ別将来都市像づくり(3)』 (2)各分科会の代表の選出
平成22年 2月 5日	第6回 会議	<ul style="list-style-type: none"> ・グループワーク(分科会ごと)『奈良市のテーマ別将来都市像づくり(4)』 ・各分科会の「テーマ別将来像」発表 ・「奈良市全体の将来像」を考えるためのキーワードについて(事務局説明) ・奈良市まちづくり市民会議代表・副代表の選出について(事務局説明)
平成22年 2月19日	第7回 会議	<ul style="list-style-type: none"> ・奈良市まちづくり市民会議代表・副代表の選出(結果報告) ・グループワーク(分科会ごと)『奈良市全体の将来都市像づくり』 ・グループ発表「奈良市全体の将来像」(案) ・「奈良市全体の将来像」(案)のまとめ(全体での話し合い)
平成22年 3月29日	第8回 会議	<ul style="list-style-type: none"> ・「テーマ別将来像」及び「奈良市全体の将来像」の発表 ・市長との意見交換

※なお、平成22年3月4日、3月9日に、一部の分科会で自主的な話し合いが行われた。

(3) テーマ別将来像付属資料

【第5分科会】

『歴史と未来、都市と田園が共生する奈良』の背景・方向性・対処方策 一覧表

キーワード		背景(問題点・優れた点)	解決・発展の方向性	取り組みの例示、→は他の欄参照	
全般	大和(奈良)は国のまほろば	日本人の心の故郷、多くの世界遺産、かけがえのない価値＝ブランド力。	正しく認識し、損なわない、守り抜く、さらに価値を高める。	→以下の諸対策へ	
	つなぐ(遺産を継承する、個別性をつなぐ、住み継ぐ)	諸要素の関連付け(横断的・世代を超えた長期的対応)が不十分。都市・環境は先人の遺産、未来世代からの預かり物。	関連づけを強め、将来を見通し全体の価値を高める。良い形で未来世代へずっと継承してゆく。	→歴史遺産の保全、都市インフラや住宅などストックの有効活用、地区間交流へ	
環境的側面	コンパクトシティ、エコシティ	脱・自動車中心の交通システム	自動車優先の交通体系、道路整備。自動車道路の高架化は景観を壊し、地下化は地下の遺物を壊す。自転車・歩行者にやさしくない。大阪・京都などへの電車は便利。	マイカー依存から脱却し、歩行者・公共交通を中心に考え直す。安心して歩ける街を目指す。	マイカー乗り入れ規制・カーシェアリング。歩道・歩行者専用道、自転車専用レーン、LRTの整備、大規模ショッピングセンター出店規制、高速道路建設計画の見直し・一時停止。
		市街地の拡大抑制	人口減少が顕著なのに開発が止まらない。緑・自然の破壊、歴史遺産への脅威。都市の規模が大きすぎず、高層建築も少ない利点。	「縮小する都市」への対応。各開発・建設が奈良市にとって本当に必要かどうか見直す。制度的不備を検証する。	逆線引き、ダウンゾーニング、緑・溜池など自然的環境の保全、地区計画の活用、新築抑制・ストック活用
	低炭素化(CO2排出大幅削減)、エネルギー自給率向上	地球温暖化(都市は責任大)、エネルギー資源の枯渇、輸入に頼るエネルギー供給、防災上の弱点、(バイオマス期待の)林業の衰退・人工林の放置。	地域性を生かし、地域で獲得できる自然エネルギーを活用。林業活性化と緊急時への備えも兼ねる。	建築物・運輸・ライフスタイル・公共施設等の省エネ化。再生可能エネルギー活用(木質バイオマス、太陽光発電、太陽熱、ミニ水力、ミニ風力)	
	上水・下水・廃棄物の適正処理と循環	上下水処理・廃棄物処理は適切か?分別回収しても最後の処理が市民には見えない。雑排水が河川に流入し汚染の一因に。	市は情報公開を徹底する。市民は再資源化に協力する。	ゴミの減量化、分別・再資源化(3R・5R推進)。公共下水道がある場合、接続の徹底。ない場合は、合併式浄化槽の普及。	
文化的側面	美しい景観形成		全般に見苦しい景観が目立つ(電柱・電線、ケバケバしい巨大な看板、街路樹は強剪定で衰れな姿)、風致地区など限られた区域は努力が実る。	都市の美観・街路景観を阻害する要因を排除する、今後は作らせない。	歴史的まちなみ保存、無電柱化・電線の地中化、街路樹の丸刈り剪定の中止、高層建築物・屋外広告物・建築物工作物色彩の規制。→地区毎の特徴へ
	地区毎の特徴・個性を活かす	世界遺産周辺地区	(共通事項) 自動車の侵入 古民家の取り壊し 緑の減少、商店街の衰退 過疎化、耕作・林業放棄 看板乱立、これが奈良の玄関口か?	観光客も安心して歩ける街に。	奈良公園のエコパーク化(鹿問題の解決も)。
		旧市街・ならまち界隈		観光スポットとしての価値を高める。	→まちなみ保全へ 古民家の外国人宿泊施設化
		西部地域の新興住宅地		誰にでも住みやすく品格ある住宅地へ改善する。	→景観対策へ、高齢者・子育て層にも住みやすい街の条件整備。
		東部地域の里山地区		都市住民・若者を活用し活性化を図る。	田舎暮らしプログラム、農林業での雇用機会確保。
		幹線道路沿線地区		景観を重視した強い建築規制をかける。	→景観対策へ、→脱自動車・マイカー依存へ
	遅れたことがアドバンテージ	「古臭い」という誤った評価。落ち着きがある。	懐かしい未来、周回遅れのトップランナー、エコで先端を目指す。	市民意識の覚醒。歴史遺産、古いまちなみ・田園風景などの保全。→エコシティへ	
市民としての誇り(シビックプライド)	市民として奈良を自慢したい一方で、恥ずかしいものがある。	恥ずかしい点を誇りの持てる姿・内容に変えて行く。	火葬場建て替え、街路樹の丸刈り剪定を中止、無電柱・電線地中化等。		
社会的側面	防災・防犯安全		様々なリスクに備える。	地域防災、交通安全、防犯。	
	福祉・安心のまちづくり		地域・コミュニティが支える福祉。揺り籠から墓場まで、生涯安心して住めるまちに。	近隣での助け合い・相談、ユニバーサルデザイン・バリアフリー。	
	都心と里山など地区間の交流		各地区の個性を生かしつつ相互の関係性を深めることで、全体の価値を高める。	有機農業・地産地消、「食住」近接、エコシティとエコビレッジ、緊急時の相互援助。	